令和７年４月１日

第１号

玉 工 通 信

〒　311-3501茨城県行方市芹沢1552
TEL　0299-55-0138　FAX　0299-55-3454
http://www.tamatsukuri-th.ibk.ed.jp

たまこう行事予定

4月11（金）～17（木）　2者面談期間
4月18（金）　防災避難訓練
4月25（金）　進路フェスタ（2年・3年合同）
5月　2（金）　体力テスト（予備日5／9）
5月　7（水）　中間考査日程発表
5月14（水）～16（金）　中間考査期間

敷地内に咲いた花

Ｒ７年３月２１日　表彰式・終業式（校長講話・生徒指導部長講話・生徒会長挨拶）

表彰式

●令和６年度茨城県高等学校ＰＴＡ連合会
　善行生徒表彰　廣瀬　賢太（電気科２年）
●令和６年度高等学校交通安全対策事業
　交通安全標語コンクール　優秀賞　椎木　友羅（１年）
●１ヵ年皆勤
・２学年代表　佐々木達矢（機械科）
・１学年代表　君島　　宇（１年）

表彰式・終業式の生徒達

生徒会長挨拶　小沢瑚々奈（電気科2年）

皆さん、こんにちは。 生徒会長の小沢瑚々奈です。
　本日は、1年間の締めくくりとなる終業式です。今年1年間を振り返ると、楽しかったこと、頑張ったこと、時には大変だったこともあったかもしれません。しかし、そのすべてが私たちの成長につながっています。
　この1年で、それぞれがさまざまな挑戦をしてきたことと思います。部活動や勉強、学校行事など、皆さんがそれぞれの場面で努力し、行ってきたことは皆さんにとってかけがえのない力の一つです。
さて、これから迎える新学期での生活は、さらなる成長のチャンスです。新しいことに挑戦するのは、不安や迷いを感じることもあるかもしれません。しかし、挑戦をしなければ、新しい自分には出会うことができません。失敗を恐れずに、一歩踏み出してみることがとても大切です。
　新しいことに挑戦するとき、最初はうまくいかないこともあると思います。しかし、その経験が皆さんをより強く、より成長させてくれます。どんなに小さな一歩でも、それを積み重ねることで、大きな成果につながります。
この春、新たなスタートを迎えるにあたり、ぜひ「挑戦する気持ち」を大切にしてください。皆さん一人ひとりが、自分の可能性を信じ、未来に向かって力強く進んでいくことを願っています。
　来年度も、共に成長し、素晴らしい1年にしていきましょう。

「ヤンキー弁護士になる」の著書をもとに、弁護士の金崎浩之さんという人の話をしました

R7.3.21

皆さん、おはようございます。
本日は終業式となり、一つの学年が終了し、４月から皆さんは新しい学年となります。この先の高校生活やその先の生活に少しでも参考になればと思い、本日は「ヤンキー弁護士になる」の著書をもとに、弁護士の金崎浩之さんという人の話をしたいと思います。

金崎さんは東京都小平市小川西町という私の実家から２５０ｍ位の所に住んでいた人で、小さい頃からよく知った人です。年齢は私の一つ上の先輩となります。

今から40～50年くらい前の話ですが、当時の東京は経済が発展してきていて、人口が一気に増えていました。そのため、様々な地方から人が集まり、エネルギッシュでありながらも、治安は良いとは言えず、子供も大変多くなっていました。小学校は小平市立第13小学校という小学校で、荒れる中学、荒れる小学校の走りでした。その頃は、強いことがカッコいいという風潮もあり、小学校の頃から学校や学校外でケンカする生徒が多くいました。金崎さんも勉強などには目もくれず、ケンカばかりしていました。みんな自分がどれくらい強いか、競い合っていたような状態です。

金崎さんの著書に書いてある内容をかいつまんで話していきます。
小学校の成績は「大変良い」「よい」「もう少し」の３段階でしたが、成績はすべて「もう少し」だった。算数も足し算、引き算、九九までくらいはやったが、それ以上はもうたくさんといった感じで勉強はしなかった。国語もある程度は漢字を覚えたが、最低限のものを暗記する程度で、音読や作文などは大の苦手だった。

私にとってはどうしたらケンカに強くなり、自己の存在感を示すことができるか、それしか頭になかった。「ケンカなどしないで、勉強をして」と母親が口やかましく言っても「いい子」になる気などサラサラなかった。勉強もダメ、スポーツもダメだった私が唯一、存在感をアピールできたのがケンカだった。家庭的に問題を抱え、それが暴力と言った形で現れたとか、学校や教師に問題があったのでそうしたことを繰り返した、ということになるのが普通かもしれないが、当時の私にとってケンカはむしろスポーツに近いものであった。

小学校時代、同じクラスに皆から一目置かれていた本田という奴がいた。五年生のときタイマンすることになった。場所は学校の裏手の雑木林、立会人を一人置き、白黒決着をつけることになった。本田は小学校のときからタバコを吸っているようなヤツでワルもまた筋金入りだった。本田は私より身長、体重が遥かに上回っていたが、私は柔道を習っていたため足払いや大外刈りでも思うようにかけることができた。ところが本田は倒れてもすぐに起き上がり、力を込めて拳を振り回して挑んでくる。本田はこんな小さなやつに負けてたまるかと言わんばかりにものすごい形相で立ち向かってくる。そして、本田のパンチがついに私の顔面にヒットした。それからは本田のペースで、立会人が見ていられないほど惨憺たるあり様だった。「もういい、本田の勝ちだ」と立会人が仲裁に入り、本田はパンチをやめた。

私は小平市立小平第二中学校へ進学した。小平二中は東京三多摩地区の荒れている中学校として名が知られていた。校内における生徒同士のケンカはもちろん、他校の中学生とのケンカも頻繁に繰り返されていた。とくに3年生は教師が手を焼くほど荒れていた。龍神会という不良組織を結成していたのである。龍神会は小平市の中学だけではなく、国立、立川、国分寺、八王子、東村山、田無、東大和、武蔵村山、清瀬、東久留米など近隣の市にある中学校の番長にケンカを挑み勝利してはその中学校を傘下に治めていった。さらに勢力の拡大を図り、杉並、中野、練馬など都区内の中学校も傘下においていった。

小平二中はいくつかの小学校の生徒が入学しており、それぞれの小学校で番長だった生徒が幅を利かせていた。その中で金崎さんもケンカをしたが、体が小さかったため、あまり勝つことはできなかった。

中3の1学期に担任に呼ばれた。「おまえこの成績では普通高校へは入れないぞ」と言われた。成績の悪さは自分でもわかっていた。担任に言われるまでもない。通知表は１と２が並んでいた。私の偏差値は３８だった。

しかし、私は高校に進学したかった。別に勉強が好きな訳では無い。勉強は相変わらず大嫌いだった。１５歳で社会に出て働く。職場で不良をすれば即クビになる。職場は働いて給与を得る場所だ。不良を演じる場ではない。それくらい私にもわかっていた。ではどうしたら高校に入学できるか。

私は学習参考書やガイドブックを買い揃え、目標とする高校選びから始めた。担任が指摘した通り、私の成績で入学できる普通高校など皆無だった。それでも、目標として第一志望に都立秋留台高校、第二第三に市立東亜学園高校、拓殖大学第一高校をあげた。

秋留台高校は偏差値４８だから少し勉強すれば合格圏内に入れると思ったが、それは内申点がある場合で、私が合格するためには偏差値を５５以上にしなければならなかった。

終業式　校長講話　続き

夏休みから猛勉強を始め、わからない問題を何回も読んでいくうちになんとなく解けるようになってきた。その結果２学期だけで偏差値を２０上げることに成功した。担任がニコニコして褒めてくれた。その結果、目標としていた高校全てに合格する事ができた。私にとっての初めての成功体験であった。

私は秋留台高校へ入学した。秋留台高校は私立高校より校則が厳しくないと思っていたのに大変厳しい高校であった。私が高校で興味を持ったのは勉強ではなく、暴走族であった。当時、三多摩地区に勢力を張っていた暴走族がブラックエンペラーである。週末に何十台もバイクと改造車が集まり、市内に爆音を轟かせて走るその姿に、私は心を奪われた。中学時代の仲間だった本田や他の友人も加わり週末は国道２０号線１６号線を走りまくっていた。初めてブラックエンペラーの集会に加わったのは入学直後の５月の連休だった。暗くなり始めた頃、多摩川の土手に集合する。小平地区のメンバーが数十台のバイクと車で２０号線へ繰り出す。徐々に近隣のメンバーも集まり、その隊列に加わってくる。改造車のけたたましいエンジン音、改造クラクション、改造マフラーの排気音が耳の奥に響き渡ってくる。いつの間にか百台近い車両の一団が構成されていた。ブラックエンペラーのバイクや車から吐き出された紫色の排気ガスが一団を包み込むようにモウモウと立ち込めていた。国道はブラックエンペラーの支配下にあるようなもので、一般の車ははるか後方から恐る恐るついてくるしかない。私達は蛇行運転を繰り返し、空ぶかしを繰り返しながらゆっくりと走行する。車の窓からはボリュームを一杯に上げたロックが流れてくる。私達はまさに不良と呼ばれたいがために、暴走族に加わり、暴走行為を繰り返していた。

秋留台高校では近隣にある秋川高校の生徒たちとゴロマンをしたことで、無期謹慎となり、２年生の１学期で退学した。そしてすでに先に中退している悪仲間の紹介で印刷会社で働くことにした。仕事は刷りだされてきた紙に印刷ミスがないかを最終チェックする仕事であった。とにかく絶望的な仕事だった。同じものを何千枚、何万枚とチェックする。それを朝から晩まで延々と繰り返す。私は入社後一週間で高校をやめたことを後悔した。そして、秋留台高校を退学したときに定時制編入を勧めてくれた担任の言葉を思い出し、電話をかけた。編入手続きをすぐしてくれて、都立武蔵高校定時制に編入学することができた。しかし、学校へはほとんど行かなかった。印刷会社の仕事も長続きはしなかった。その後は喫茶店のウェイター、土木作業員、警備員、市議会議員の選挙の手伝いと様々な仕事についてみたが、短くて１月、長くて半年しかもたなかった。ヤクザの組員にならないかという勧誘も受けた。広域暴力団系の組であったが、組員は数人しかおらず、良い暮らしができそうにはなかったので断った。その後、アルミサッシのセールスの仕事では、実力次第で月百万と言われていたが、契約が一つも取れず、一月働いて一円の給与ももらうことができなかった。私は、騙されていたことを知った。

仕事をやめたからと言ってすぐに気に入った職につけるわけではない。アルバイト情報誌や新聞の求人覧を見れば色々な職種を募集しているが、中卒ではそのほとんどに応募することができないことを私は嫌と言うほど思い知らされた。せめて高校くらいは卒業しておかなければ、就職できる会社も職種も限られてしまう。中学の時に職業選択の自由があると学んだが、そんなものは絵に描いた餅でしかなかった。

１７，１８歳になると、私の悪友たちも暴走族から１人抜け、２人抜け、足を洗っていった。彼らも不満や愚痴をブツブツ言いながら、働いて生活することの大変さを身を持って知るとともに、それを受け入れざるを得なかった。

その後、私は大学を目指した。その理由は大学を卒業しないと自分のやりたい仕事につけないことを嫌と言うほど、身体で体験したからだ。他のワルたちも全く同じ体験をしていたはずなのに誰一人として大学を目指した者はいなかった。ほとんどの仲間は「オレはバカだから大学なんて関係ねえよ」と口にした。彼らは、自分に能力がないと勘違いしている。バカでもなんでもない。ただ勉強をしていないから、点数が悪いだけである。こんな簡単な道理を勉強してこなかったがゆえに思い至らないのである。

私がそう思わなかったのは、自分の目標の高校に入ることができたたった一回の成功体験、すばらしい達成感を味わった事があるからである。今回も少し勉強すれば、大学に合格できるだろうと、そんなに深刻に考えなかった。

その後、金崎さんは２０歳で定時制高校を卒業し、京都外語大学に進学しました。２４歳で大学を卒業すると、弁護士を目指して勉強をやり続け、２９歳のときに見事に司法試験に合格しました。

著書の最後方に、金崎さんが書いていることがあるので紹介します。

非行の原因は一体どこにあるのか。家庭にあるのか、学校にあるのか、その両方なのか。私はずっと、どちらも非行の原因ではないと思ってきた。私は親に反発したてグレたわけでもないし、学校教育に不満があったわけでもない。勉強嫌いの私にとって自分の存在感を示す場所がケンカだったから不良になった。数学でも英語でもなく、野球やサッカーでもなかったというだけの話だ。

しかし、自分のステータスを築けた不良の世界も、ある一定の年齢に達すると、暴走族であり続けることが、逆にカッコ悪いことになる。その結果、不良のほとんどが非行の世界から自然と足を洗っていく、不良の世界なんて蜃気楼のように消えてしまうものなのだ。

問題になってくるのは、不良を卒業してからの身の振り方だ。暴走族卒業後、幸運な生活にたどり着けるのは一握りしかいない。行き場を失ってしまった者を私は何人も見てきた。学歴もなく、俳優やプロスポーツ選手になれる能力があるわけでもない。結局ヤクザの世界に就職せざるを得ないというやつも出てくる。

自己実現を可能とするためには、高校を卒業し、しっかりした企業に就職するとか、大学に進学してその後就職するというのが一番現実的となる。しかし、一度ワルに染まった連中は、これがプロのスポーツ選手になるのと同じくらい困難な方法に思えてしまう。ほとんどのワルが勉強の世界において成功体験を持っていないからだ。

ワルをやった連中の成績が悪いのは、自分は頭が悪いと信じ込んでいるからだ。誤解を恐れずに言わせてもらえば、非行少年のほとんどは頭が悪い。私もワルをやっていた頃は恐ろしいほど頭が悪かった。しかし、今も暴走族時代のように頭が悪いとは思っていない。なぜなら、勉強したからだ。勉強しさえすれば頭など良くなるのだ。「金崎は勉強が嫌いなだけだったんだ。本当は頭が良かったんだ。だから司法試験にも合格できたんだ」

昔の仲間からよくこう言われるが、それは全く違う。私は小学校の頃、教科書も普通に読めなかった。自分で言語能力に問題があるのではないかと思ったくらい、ひどい朗読をしていた。ところが読書量が増えてくると読むスピードも速くなるし、理解する力もついてくる。つまり、訓練のたまものだということに気がつく。やせ細っている腕でも、毎日腕立て伏せをすれば、次第に筋力がついていく。これと同じことである。そんな簡単なことが、ワルに走った連中にとっては気づきにくい。世の中の秀才と言われる人たちのほとんどは、勉強をしてきたから成績がいい。ただそれだけのことなのだ。

なぜ、私は高校受験、大学受験、司法試験を途中で挫折しないで、乗り越えられたのか。それは自分の可能性を最後まで信じることができたからだ。もし、才能と呼ぶべきものが私にあるとしたら、最後まで自分の可能性を信じることができた。　この一点に尽きると思う。

以上が、本に書いてある内容です。

最後に付け加えておきます。昭和の時代背景は今とは大きく違っています。昭和の時代に盛んであった暴走族はその地域にもともとあったものではありません。地方から移り住んできたことで人が増え、それに伴ってできたクラブ活動のようなものと考えています。伝統的なものでもなく、時代の中で泡のように膨らんできて、いつの間にか消滅していったものです。

そして、当時は、暴走族を取り締まる法律もなかったため、若者のエネルギーがそこに向かっていたと考えられます。

さらに当時、高校生が逮捕されることは、よほどのことでなければなかったと思います。暴走族やケンカなどでは逮捕されることはありませんでした。

また、大学にさえ行けば、「良い仕事に就ける」という社会であったのも、この時代の話です。

ちなみに、金崎さんは小学校時代からケンカで自己主張していましたが、私は地域の大イベントであった、相撲大会で小学校時代から常に３本の指に入る強さでした。そのため１３小の大塚は強いということは近隣の小学校でも大変有名でした。そのため、それほど、ケンカに明け暮れたことはありません。さらに金崎さんは偏差値４８の秋留台高校に進学しましたが、私は偏差値３８の伊豆大島の水産高校へ島流しのようにして進学しました。私のことについては、皆さんの想像におまかせします。

本日、無事に今の学年を終えた皆さんには、自分の将来のことを良く考え、今やれる努力をしっかりやって、これからの学校生活をおくり、社会に出ても幸せに生活できるようになってもらいたいと思います。勉強の嫌いな人は多いかもしれませんが、皆さんには大きな夢を掴むチャンスがありますので、ぜひ頑張ってください。

以上で終業式挨拶を終わります。

Ｒ６終業式講話

年度末に講話の機会をいただけてありがたい。今年度の振り返りをしながら３つ話をしたい。

１　　交通について

年度を通じて命を大事にすることを伝えてきた。結果として登下校中の事故の件数も減り、死亡事故も無かったことは非常に安心している。自転車やバイクの死亡事故に繋がる要因にはヘルメットをしないことやイヤホンをつけていたこと、速度を出し過ぎていたこと、注意力散漫であったことなどがある。数多くある要因に皆さんが気づき、各自が注意をすることは事故の減少に繋がる。体や命はひとつずつしかない。無くしてしまわないように、大事にしてほしい。

１　　問題行動の改善について

今年度の指導件数は３７件であった。どのような指導が多くあったか考えてみてほしい。昨年度、最も多かったのはＳＮＳに関連するトラブルであった。これについては年度初めから繰り返し注意を促し、皆さんもよく理解したことで、１件のみの指導となった。話を聞き、理解をしてくれたことは大変すばらしいことだと思っている。一方で増加傾向にあるのは喫煙と無許可通学である。指導となった生徒たちは「友だちづきあいの中で吸った」「もう吸わない」「今日だけのつもりで乗ってきた」「ばれないと思った」等と話し、「親や先生、友人に迷惑をかけた」と反省して指導を受け入れていた。大事なのはそもそもやらないこと。次に大事なのは、自分の未熟さに気づき、受け入れること。２０歳未満はたばこを吸ってはいけないし、学校に在籍している以上は数少ないルールを守る必要がある。ＳＮＳ関連の指導件数が皆さんの理解によって激減したように、喫煙や無許可通学、その他のルールについてもここで理解してほしい。

１　　次年度に向けて

つくづく思うのは、学校は生徒が雰囲気をつくるということである。個人が表情暗く、下向きな様子であると学校の雰囲気も暗くなる。同じ静かな状態でも、ものづくりに熱心に取り組む姿や知識の習得のために耳を傾けている姿には力がある。ただ静かにしていれば良いという訳ではなく、やるべき事を前向きに捉えられるようになってほしい。「悩みがないなんて人は深く考えていないだけ」という言葉を聞いたことがある。次年度は各科に進んだり、進路を決定したりするタイミングを控える皆さんには、自身が主となって、前向きに、悩みを解決しながら生活してほしいと思っている。加えて自分の周りには多くの人がいることを忘れずに、自分勝手にならないようにしてほしいと思っている。学校の雰囲気は生徒が左右するのだから、これらができれば皆さんも玉工も、きっと良い雰囲気で成長できる。良い年度のスタートをきるつもりで始業式に来てほしい。